

風流なる屋形船に揺られ、美酒と天麩羅を楽しむ。特に櫻を船より愛づるは味なるもの。過去に二回斯の如き機會に恵まれたれど、屋形船の船上にて食事するはなかなか難儀なりと記憶す。

一度目は友人の猫の十歳の誕生日とて招待せらる。浅草橋より乗船し、東京灣にて天麩羅の夕食を賜はる。されど、前日東京灣の花火大會、雨のため順延せられたれば、數夥しきのありとあらゆる船東京灣に犇めつ。隣の船に手が届く程の舷側に波去來して、横に揺らる、といふよりは、大海原の小舟のごとく上下に揺る。また、船の揺れ大きく、船酔ひして顔蒼ざめ、花火鑑賞の氣分に及ばざるあり。招待客は屋形船の眞上にて爆音に續く排煙と共に上がる花火をただただ啞然と見上ぐるのみ。乗り物に強きはらずの我も船酔ひ状態になりけり。猫はと見れば、飼ひ主の家神宮球場に近く、夏の花火に慣れ親しみたるゆゑか、大きな音の花火空に舞ひ上がれど、さして驚きもせず、籠の中より鑑賞の風情なり。

二回目は外務省の某大使主催の櫻鑑賞のため、屋形船貸し切りにて清澄庭園まで上りし時なり。濱松町より乗船、これまた、猛スピードにて庭園まで走行する船は、まさに颯風に向かふ漁船のごとく揺る。庭園近くに到着すれど、天麩羅など箸を附くる氣にもならざりしは未だに心残りす。又、確かに満開の櫻は素晴らしけれど、赤と白の提燈多く飾らるるも興ざめなりけり。

屋形船にての夕食は花見程には風流にあらざりけり。